



希少種と黒ボク土

写真：国営アルプス安曇野公園に移植されたキキョウ

火と草原の生きもの

地球の長い歴史の中では、野火や山火事も生物の進化に影響を与えてきたとされており、自然界には火に強い生きものが存在しています。そのためか日本の草原にも、火入れのあとに生き残る植物や昆虫が見られます。

最終氷期が終わり、縄文時代以降の温暖な気候になると、氷期に広がった草原は森林化するようになりました。けれども人が火入れ、草刈りや放牧をした場所では、草原が保たれました。このような草原を半自然草原といいます。しかし、半自然草原は過去1世紀に約9割減少し、今では国土のわずか1%しかありません。半自然草原は、今では希少種の宝庫です。黒ボク土は、火災を伴う草原環境の下で発達したと考えられています。そして草原性の希少種は、黒ボク土のある場所によく見つかります。

キキョウが群生した安曇野

長野県では、お盆前に野山でキキョウなどを採取する盆花採りが広く行われていたとされています。しかし、現在、キキョウは自生地が減少しており、長野県



写真2 オオルリシジミ

のレッドリスト（2014年）では準絶滅危惧、環境省のレッドリスト（2020年）で絶滅危惧Ⅱ類にリストされるようになりました。そのため、キキョウの盆花採りも、言わば“絶滅のおそれのある文化”になっています。

そうした中、当所標本庫に寄贈された植物標本を整理していたところ、安曇野市（旧穂高町）有明原で“キキョウが咲き乱れる”、との新聞記事を見つけました（植物標本は新聞紙ではさんでつくる押し葉標本のため、標本と一緒に古い新聞も標本庫にやってきます）。新聞は、昭和29年8月6日の信濃毎日新聞（中信版）で、キキョウの花をつむ人でにぎわっているとの記事にあわせて、花を摘もうとする（？）人の写真も載っていました。さらに読むと、“戦前から有名なキキョウ”ともあり、有明原には古くからキキョウが群生していたようです。

黒ボク土と希少種の歴史

キキョウが咲き乱れる草原というのは、今の安曇野ではちょっと想像できません。

しかし、この地域には黒ボク土が分布しており、キキョウと同じく草原性で現在は絶滅危惧種となっている、オオルリシジミやホンシュウハイイロマルハナバチが最近まで残っていました（オオルリシジミは現在、安曇野市で保護回復がすすめられています）。

有明原には、戦前に陸軍の演習場があったそうで、演習場の草原環境がキキョウや他の草原性の生きものによい生育/生息地になっていたのかもしれない。また、そもそも演習場として利用される草原環境が、安曇野の扇状地上に維持されてきた、そういう土地の履歴と関係がありそうです。

草原性の希少種は、黒ボク土を生んだ人の歴史とともに生き残ってきたのではないのでしょうか。

（須賀 丈・尾関 雅章／自然環境部）



写真1 信濃毎日新聞（昭和29年8月6日）

